



# 巻頭言

## コミュニケーション学の確立を目指して

会長 高井 次郎 (名古屋大学)

災害が立て続き起った夏でしたが、皆様ご無事でいらしたことを祈っております。台風のシーズンもようやく終息に向かっており、秋の晴天が楽しみです。

今年の6月のJCA第48回年次大会の総会におきまして、会長に就任させていただくことをご承認いただきました。この度は、日本コミュニケーション学会の第24期会長としてご挨拶させていただきます。

その年次大会ですが、札幌医学技術福祉歯科専門学校において「コミュニケーションとコミュニティ」をテーマに、北海道の手厚いおもてなしを実感できる素晴らしい大会を北海道支部の皆様によって開催していただきました。本州から離れた大会は、その地域性に富んでいて、とても有意義な大会に参加させていただきました。

今年で48回目の大会でありましたが、私が日本コミュニケーション学会(当時CAJ)の大会に初めて参加したのは31年前の第17回大会でした。国際基督教大学時代の恩師のEdward Stewart教授の勧めで出席しましたが、多数の参加者の中には岡部朗一先生、石井敏先生、川島彪秀先生や久米昭元先生など、日本のコミュニケーション学の創設者が来場されており、大きな刺激を受けました。翌年の18回大会では口頭発表を行い、その発表論文を学会誌に掲載していただきました。当時はまだ大学院生(博士後期課程・教育心理学専攻)であったため、自分の論文を学会誌に載せていただいたことに感動し、その後の研究の励みになりました。

ただし、当時は現在のような厳格な査読を経て論文が掲載されることはなく、発表論文から選抜し、筆者たちが準備したフルペーパーをそのまま冊子体にまとめたもので、見栄えが良いとはお世辞にもいえませんでした。また、論文の内容も大部分が英語教育に関連するもので、純粋にコミュニケーション関連と判断できるものがむしろ少数派でした。実際に、当時のわが国のコミュニケーション学は英語教育と切り離せない存在にあり、日本コミュニケーション学会も半ばJALT、JACETに次ぐ英語教育の学会でした。このことに対して、岡部先生を主宰とする名古屋コミュニケーション研究会のメンバー間で議論する機会が多々あり、CAJのアイデンティティ葛藤問題を痛感するようになりました。

1996年から近江誠先生のお誘いで、初めてCAJ(当時の名称)の理事に就任しました。当時の学会運営の姿勢は現状維持でしたが、編集担当理事の畠山均先生が学会誌だけは今のままだとだめだと判断され、査読制の導入及び体裁の統一をより立派なものにさせていただきました。また、2000年代初期に、池田理知子先生および柿田秀樹先生と事務局を運営する機会があり、大会の発表を審査制とし、「コミュニケーション学会」に相応しい発表テーマに限定する方針を確立しました。これによって、大会の発表件数は減りましたが、その一方でコミュニケーション学に特化した内容になり、まさに「コミュニケーション学会」らしいコンテンツが実現されました。



CAJ・JCA の最も大きな転換期は、2007 年から始まったと思います。当時の近江誠会長が、学会の若返りのため、新会長に今堀義先生を指名しました。今堀先生は学会のリフォームに関する多数のアイデアをお持ちであったものの、就任後間もなく急逝なさってしまいました。しかし、引き継がれた宮原哲会長は、海外の International Communication Association (ICA) との連携に力を注ぎ、2010 年には東京 (明治大学) に於ける ICA Pre-conference を、また 2016 年には ICA 年次大会を福岡に誘致することに成功し、CAJ の国際的知名度をあげました。後任の五島幸一会長は国際化を反映すべき、学会の英語名称を CAJ から Japan Communication Association (JCA) に変更し、学会誌を 2 タイトル・年 1 回発行から、『日本コミュニケーション研究』の 1 タイトルに統一し、年 2 回発行をすることでわが国におけるコミュニケーション学のアイデンティティの確立およびプレゼンスの向上をはかりました。

宮原・五島両会長の功績は大きく、これ以上学会の改善は望めないほどであります。当面の課題は会員層の拡大であると思います。日本コミュニケーション学会は日本最大のコミュニケーション学会でありながら、近年医療・健康、文化、情報、ビジネス、コミュニケーション障害など、特定領域に特化したコミュニケーション学会の会員の誘致にまだ十分ではない点が気になります。また、社会心理学、社会言語学、文化人類学など、多領域に多数のコミュニケーション研究者がいるにもかかわらず、「コミュニケーション学者」としてのアイデンティティをお持ちではないことが残念で、その原因はまだ日本において「コミュニケーション学」は学問として認識されていないことにあると思います。

新会長として、微力ではありますが、前会長の先生方から引継ぎ、コミュニケーション学の確立に努力したい所存でございます。会員の皆様にご支援、ご協力賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

## 第 48 回年次大会報告

大会実行委員長 長谷川 聡 (北海道医療大学)

2018年6月9・10日、北海道札幌市において第48回年次大会が開催され、会員約70名が参加しました。会場は交通の便の良い札幌医学技術福祉歯科専門学校をお借りしました。まずは会場をご提供いただいた学校法人西野学園と、会場窓口として労を厭わずお世話いただいた織田なおみ先生(同校介護福祉学科教員)と、その橋渡しと当日のサポートをしてくださった平野啓介先生(旭川大学)に感謝申し上げます。そして今年の大会テーマ「コミュニケーションとコミュニティ」の旗の下、学術講演1題、研究発表9題、パネル企画6題と盛り沢山の内容でプログラムは進行了しました。



学術講演は「幻聴さん、いらっしやい!—私の観る世界・生きる世界—」と題して、精神科ソーシャルワーカーの向谷地生良先生(北海道医療大学看護福祉学部教授・浦河べてるの家)と、向谷地先生と活動を共にする障がい当事者3名の方々による統合失調症のお話をいただきました。この時間は一般公開のため、札幌市内・近郊からの一般参加者もあり、100名定員の教室がほぼ一杯に埋まりました。そして医療・福祉・保健分野ではない会員研究者も多く、障がい当事者の感じ取る世界やコミュニケーション感覚、あるいは当事者や家族・地域のコミュニティとコミュニケーションの話題は刺激的で、研究・教育の上でとても勉強になったと好評をいただきました。



最近の学会参加の動向を意識した、会員の創意工夫によるパネル企画も今年の特徴だったかもしれません。「政治参加」パネルでは「コックイオンドク」をテーマに、パネラーが実際の国会議事録によりリーディングシアターを実演し、其々の専門領域から国会論戦を分析しました。会場からは笑いも積極的な発言が生まれました。学術局セッションでは全国支部長から各支部活動の様子が伝えられ、学会を盛り上げる創意工夫がそれぞれに実践されている情報交換の場となりました。

懇親会は「たまにはざっくばらんに、全国の仲間が気取らずに交流する」ことを目的に、札幌の繁華街・狸小路の居酒屋に席を移し、北海道料理に舌鼓を打ちながら、貸し切りスペースで時間を忘れて楽しんでいただきました。遅い時間に、大会会場を離れたのにも関わらず40名もの参加があったことが、この企画の成功を物語っています。

本大会は学術局、事務局の先生方の支援の下、北海道支部役員10名が一丸となり、また役員の子らのボランティアを得て成功させることができました。お名前を上げる紙幅がありませんが、お手伝いいただいたすべての皆さまに心より厚く御礼申し上げます。大会報告といたします。有難うございました。



## 2018 年度 第 1 回理事会報告

2018 年 6 月 8 日（金）14 時から 2018 年度第 1 回理事会が、札幌医学技術福祉歯科専門学校にて開催された。20 名の理事（委任状 5 名を含む）の出席により理事会は成立した。

### 【会長挨拶（要旨）】

北海道での年次大会開催につき、ご準備くださった各先生方のご尽力にお礼を申し上げます。明日からの大会 2 日間どうぞよろしくお願いたします。

### 【報告事項】

#### 【1】 第 48 回年次大会

##### 1. 学術局（野中）

大会開催への協力について感謝が述べられ、準備についても大きな問題もなく進んできている旨が報告された。

##### 2. 会場担当（長谷川）

大会当日の動きについて確認が行われ、懇親会会場についての説明があった。

#### 【2】 各局および担当理事報告

##### 1. 事務局

###### (1) 入退会者および会費納入報告（高永）

- ・ 会員全体数（一般会員 357 名、学生会員 17 名 準会員 2 名 合計 376 名）
- ・ 会費納入率について 2017 年度実績が報告された。

###### (2) 会計報告（松島）

理事会交通費の支払いが行われたことが報告された。また、支部大会・支部助成金の支払い方法の変更が説明され、各支部へ早めの申請のお願いがあった。

##### 2. 学術局

###### (1) ジャーナル関連（高井）

以下のジャーナル関連の報告があった。

- ・ 『日本コミュニケーション研究』第 46 巻 第 2 号 発行（2018 年 5 月 31 日発行）
- ・ 『日本コミュニケーション研究』第 47 巻 第 1 号 審査状況（2018 年 11 月 30 日発行予定）。査読結果は条件付掲載可 2 本、掲載不可 8 本となった。査読結果は投稿者に通知済み（2018 年 5 月 6 日）。
- ・ 『日本コミュニケーション研究』第 47 巻 第 2 号 投稿論文募集締め切り（2018 年 7 月 31 日）
- ・ ISSN 登録手続完了（オンラインジャーナル前身誌 2 誌分）2018 年 4 月 26 日

ISSN: 2433-1066 『ヒューマン・コミュニケーション研究』

ISSN: 2433-1074 『スピーチコミュニケーション教育』

###### (2) 学会賞関連（高井）

学会賞の報告と引き継ぎ事項について報告がされた。

### 3. 広報局

#### (1) ニュースレター118号の発行と119号の予定（田島）

ニュースレター第118号を発行した。次号は8月下旬に原稿依頼をし、9月初旬に原稿締め切りの予定。

#### (2) 第48回年次大会の広告・ブース出展企業について（小山）

年次大会プログラムの広告協力企業は、プログラム掲載の通り6社（有斐閣、ナカニシヤ出版、ひつじ書房、朝倉書店、くろしお出版、大修館書店）。展示企業はなし。

#### (3) Web 関連（小山）

##### ・ 年次大会の広報

4/10 事前申し込みサイトを掲載

5/16 チラシとプログラムを掲載

##### ・ ニュースレター

5/29 JCA ニュースレター最新号（118号）を掲載

##### ・ 学会誌

5/28 第47巻2号の論文投稿案内を掲載

##### ・ その他

NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル、教員公募、異文化コミュニケーション学会の年次大会など、随時掲載

### 【3】 各支部報告

各支部より報告がされた。

### 【4】 各理事からの報告

#### 1. 海外渉外・50周年記念担当理事（宮原）

NCAのJUCAやICAとの協力を探りながら、50周年大会を構想している。また、50周年記念出版としてテキストの作成を検討している。

## 【審議事項】

### 【1】 第48回年次大会関係

審議事項なし

### 【2】 各局関係

#### 1. 事務局

##### (1) 入退会者と除名対象者について

新規入退会者と会費未納による除名対象者について確認が行われた。

##### (2) 2017年度決算と2018年度予算案について

総会での審議内容が決定された。

##### (3) 役員の任期について

新年度の役員の職務は6月の総会のあとから始める方針が決まる。

## 2. 学術局

### (1) 学会賞関連

学会賞の審査について審議され、継続審議となる。対象となる著作の出版年度については限定をなくす方針が決まる。また、年次大会での賞の授与方法について確認がされた。

(2) ジャーナルの出版年度のずれについて審議され、継続して検討されることになった。

(3) J-Stage に対応したスタイルについて

継続して調査し、学会誌の規定を含め引き続き検討を行うことが決まった。

## 3. 広報局

### (1) Web 関連

- ・ ジャーナルの電子化について検討され、会員の利益を確保しながらオープンアクセスをめざす方向で継続審議することになった。
- ・ HP について、委託業者等方向性が決まり、刷新作業を進めていくことになった。

## 【3】 その他

### 1. 次期体制について

次期体制について総会での審議ならびに報告の内容が確認された。

## 【4】 次回理事会開催日時・会場

12月22日(土) 13:00~17:00 関西大学東京センター(丸の内サピアタワー9F)にて開催予定

## 第48回年次大会 総会報告

日 時：2018年6月9日(土) 14時10分～15時00分

### 【全体会議】

1. 総合司会の高永茂事務局長より、総会の開始が宣言された。五島幸一会長より挨拶が述べられた。
2. 学会賞として、論文の部、山口生史先生(明治大学)〔高齢者介護施設職員間の情報共有と介護の質の認識との因果関係—交互遅延効果モデル分析—〕が紹介され、五島会長より賞が贈呈された。
3. 第47回大会実行委員長、京都ノートルダム女子大学の小山哲春先生に五島会長より感謝状が授与された。
4. 長谷川聡実行委員長から、挨拶と大会の諸連絡があった。
5. 高永茂事務局長より、会員向け総会を開催する旨が説明された。

### 【総会】

6. 五十嵐紀子先生(新潟医療福祉大学)が議長に推薦され、拍手で承認された。
7. 五十嵐紀子議長により、会則38条では、「会員総数の5分の1以上の出席」が議決の条件であることが確認された。それに基づき、現時点における会員数376名の内、総会出席者33名、委任状78通の合計111名(会員数376÷5=75.2名)で、総会が成立したことが確認された。また、菅家知洋副事務局長の書記就任が、拍手で承認された。
8. 五島幸一会長より、新会長として名古屋大学の高井次郎先生選出された旨が述べられた。高井次郎新会長より新体制、ならびに役員人事が発表された。また、理事会より監事として選出された鳥越千絵先生(西南学院大学)と丸山真純先生(長崎大学)が、拍手で承認された。
9. 五島幸一会長より、2017年度事業報告として、第47回年次大会が京都ノートルダム女子大学にて開催されたこと、ジャーナルが発行されたこと、業務委託先の変更が行われたことが報告され、拍手で承認された。
10. 高井次郎新会長より就任の挨拶があった。また、第49回年次大会を関東で開催することが発表された。
11. 高永茂事務局長より、2018年度の業務委託契約について説明があった。また、小山哲春広報局長より、ジャーナルの電子化、マイページの利用、JCAホームページのリニューアルについて説明があった。
12. 松島綾副事務局長より、2017年度決算報告として、以下の点が示された。

#### (1) 収入の部

- ・年会費(一般会員)：実際の会員数が358名。そのうち年会費を支払った会員数が308名。
- ・年次大会(ジャーナル売上)：J-Stage移行に伴い、ジャーナルを無料で閲覧・ダウンロードできるようになったので、過年度のジャーナルを年次大会では無料で配布した。
- ・年次大会において京都ノートルダム女子大学から助成金5万円をいただいた。
- ・雑収入(その他)：繰越時の不一致分を計上。マイナスはない。

#### (2) 支出の部

- ・プロシーディングス送料、総会ハガキ印刷費、年次大会関係通信費、学会誌保管料など、学会支援機構から国際文献社への移行時期のため、何点か学会支援機構関係の出費があるが、2018年度から全て国際文献社に委託される。

鳥越千絵監事(西南学院大学)より、丸山真純幹事(長崎大学)との厳正な監査の結果、適正な会計処理が行われていることが報告された。上記の内容が、拍手で承認された。



13. 松島副事務局長より、2018年度予算案として、以下の点が示された。

(1) 収入の部

- ・ 年会費：現学会会員数に合わせて計上。
- ・ 年次大会（弁当代）：今年度は年次大会運営委員の弁当代のみ。
- ・ 雑収入：電子図書などは無料で閲覧可能となるため、収入はなし。

(2) 支出の部

- ・ ホームページ関係費：
  - a. ホームページのリニューアルするための費用。継続的なものではない。
- ・ 年次大会関係費：
  - a. プログラム費：昨年同様プロシーディングスのみの発行となるため計上なし。来年度から項目も削減予定。
  - b. 総会はがき作成費：2017年度までは事務費の中に組み込まれていたため、2018年度からわかりやすいように項目を立てた。
  - c. 会場設営費：無料で会場を借りることが困難となってきたため計上。
  - d. 事前参加申し込みシステム費：2017年度のみシステムの構築費分が減額。
- ・ 会議費：
  - a. 理事交通費：例年の傾向を鑑みて減額。
- ・ 人件費：
  - a. 例年の傾向を鑑みて減額。
- ・ 事務費：
  - a. 事務委託費：国際文献社の見積もりに基づいた額。

上記の内容が拍手で承認された。

14. 五十嵐紀子議長から議事の終了が宣言された。

15. 総合司会の高永茂事務局長より、総会終了が宣言された。

## 学術局報告

### 2018 年度学会賞報告

#### 論文の部

山口生史著「高齢者介護施設におけるケアの質の認識と職員間の情報共有との因果関係」

(『日本コミュニケーション研究』第46巻2号掲載)

本論文は、組織コミュニケーションで扱われる場面として高齢者介護施設をとりあげ、組織コミュニケーションの重要なテーマである「情報共有の正確性とタイミング」と「介護の質」の因果関係について、交差遅延効果モデルという研究手法により明らかにしようとした大変意欲的な論文です。特に、研究テーマもさることながら、これまでの横断的研究の限界であった因果関係について、時系列的にデータを収集するなど、大変精緻かつ労力がかかる大規模な横断的調査を実施され、興味深い結果が提示されています。本論文は組織コミュニケーションだけでなく、広くコミュニケーション学、特に社会科学的方法からの研究の発展に寄与する論文であり、高く評価されるものです。また、データの収集・分析方法から結果の解釈・考察まで適切かつ説得的に記述されている点でも非の打ち所がなく、実証的コミュニケーション研究の範をなすレベルに達しています。

以上の点を全て勘案し、本論文を論文の部の学会賞として高く評します。

## ジャーナル投稿について

5月に『日本コミュニケーション研究』第46巻第2号が無事発行されました。現在は、第47巻第1号の準備が進められ11月末には発行予定となっています。また、第47巻第2号の締め切りが7月末に終了し、再投稿論文も含めて9本の論文が投稿されました。こちらは2019年5月末の発行を目指し、目下査読作業が行われています。

現在は、第48巻1号(2019年11月末発行予定)への投稿論文を募集中です。締め切りは3か月後の2019年1月末日です。是非皆様の研究結果を論文としてご投稿ください。投稿の際には、ワード等で作成された電子ファイルを添付ファイルとして指定メールアドレスに送付してください。投稿論文送付の際には、(1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「ファイル作成に使用した機種を加えた著者情報」、の3つのファイルを添付してください。執筆・投稿の詳細は、公式ホームページにある「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照ください。

投稿される際には、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付をお願い致します。メールアドレスは以下の通りです。

**To: journal[ @を入れる ]caj1971.com**  
**CC: ohashiri[ @を入れる ]ouj.ac.jp**

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の大橋 ([ohashiri\[at\]ouj.ac.jp](mailto:ohashiri[at]ouj.ac.jp)) までご連絡ください。可及的速やかに対応致します。

常に言われることですが、学会ジャーナルは年次大会とともに学会の顔です。ここでどのような論文が掲載されるかで、日本におけるコミュニケーション研究の在り方が示されます。査読者の方々はこのことを念頭に置いて、コミュニケーション研究として高い水準を求めて査読されていると思います。毎号、投稿数に比べて掲載数が少ないのは、厳密な査読によってジャーナルのレベルが非常に高く保たれていることの証だと考えています。

学会員の方・非学会員の方共に、是非これからも積極的な投稿をお願い申し上げます。

(副学術局長:ジャーナル担当 大橋理枝)

## 第49回年次大会 発表論文・企画セッション募集

来年度2019年に行う第49回年次大会の発表論文・企画セッションを募集いたします。研究成果の発表はもちろんのこと、それ以外にも会員相互の議論や研鑽、あるいは最近ちょっと気になる研究や教育の問題、これから取り組みたい研究・教育活動や社会実践活動など、今回のメインテーマ「都市とコミュニケーション」を中心に賑やかな大会にしませんか。以下をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

- 【大会開催要項】
- 日程 2019年6月8日(土)・9日(日)
  - 場所 二松学舎大学九段キャンパス(東京)
  - テーマ 都市とコミュニケーション

### 【募集内容】

- 応募締切 発表・企画申込 2019年1月末日  
発表原稿提出締切 2019年2月末日
- 応募・問合せ 副学術局長 長谷川聡(大会担当、北海道医療大学)  
MAIL: [haseg\[at\]hoku-iryo-u.ac.jp](mailto:haseg[at]hoku-iryo-u.ac.jp)
- 募集1. 研究発表 質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提としたいいわゆる研究発表です。
- 募集2. 企画セッション 会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90分程度の自由企画です。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、統一テーマの論文発表、模擬講義など。その他の企画案も可能ですので、学術局にご相談ください。

### ○応募方法

#### 1. 発表・企画申込(プログラム掲載要旨申込)

- ※まずは1月末日までにメールで発表申込をお知らせください。
- ※メール件名に「JCA 大会申込」と記してください。
- ※メール本文に「研究発表/企画セッションの別、演題/企画名、発表者の氏名・所属を記してください。
- ※プログラム掲載用要旨原稿ファイルを添付してください。ファイル形式は自由です。要旨は和文・英文が必要です。要旨にも演題名、発表者氏名・所属を入れてください。
- ※本文字数は和文800字以内、英文300語以内です。
- ※締め切り後、学術局で検討して発表・企画の採否をできるだけ速やかにお知らせします(おおむね7~10日)。

#### 2. 発表原稿提出(プロシーディングス掲載要旨送付)

- ※プロシーディングス掲載要旨を2月末日までにメール添付ファイルで送付してください。
- ※プロシーディングス掲載要旨は和文・英文が必要です。企画名・発表者氏名と所属も入れてください。字数は和文3000字以内、英文1000語以内(脚注含む)で、いずれもA4版縦置・横書で見開き2頁に収まる分量を目安にしてください。

○その他 個人発表は会員限定。グループ発表は筆頭者および発表者が会員限定です。非会員の発表希望者は応募時までに入会手続きを済ませてください。

## 事務局報告

### 事務局からのご報告とお願い

#### 1. 会費納入のお願い

年会費の振込用紙を7月中旬にお送りしました。未納の方はお早めにお振込みくださいますようお願い申し上げます。

#### 2. 学生会員・準会員登録申請締め切り

大学院生対象の学生会員、学部生対象の準会員としての登録は7月末日をもって締め切りました。前年度学生会員または準会員であった方で、新たに登録をされなかった方は自動的に一般会員に切り替えますのでご了承ください。なお、すでに今年度の学生会員または準会員の会費を振り込み済みで登録をされなかった方には差額を請求させていただきます。

#### 3. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には、速やかに日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までメール、郵送、ファックスのいずれかの方法でご連絡ください。年会費の振込用紙での変更届けはできませんのでご了承ください。

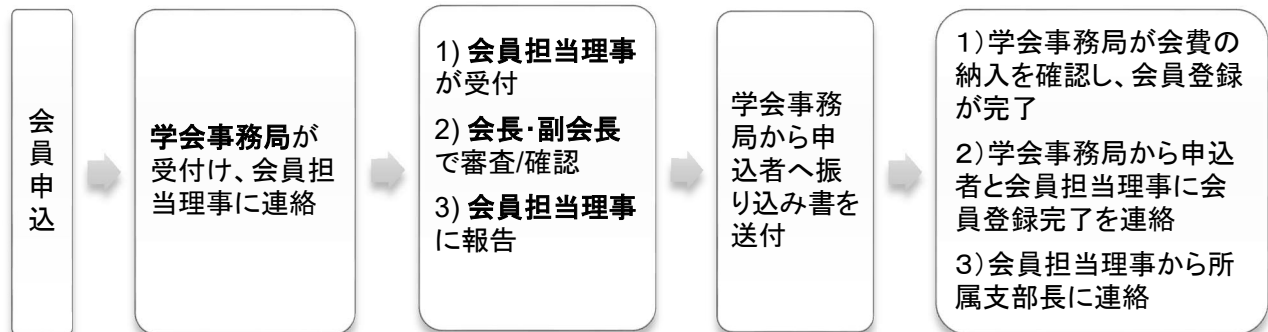
#### 4. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

#### 5. 新規会員の手続き

JCAでは、新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がありましたら、学会事務局までご連絡ください。

皆様のご協力をお願い申し上げます。



## 広報局便り

### 1. 第48回年次大会の広報局活動

第48回年次大会ではプログラム広告に多くの企業からご協力をいただくことができました（プログラムの広告：ひつじ書房、ナカニシヤ出版、有斐閣、朝倉書店、大修館書店、くろしお出版）。厚く御礼申し上げます。

広報局では、次年度の大会にむけて、引き続き努力を続けます。皆様も、ご紹介いただける企業がございましたら、ぜひ広報局にご推薦・ご連絡をください。

### 2. 各支部の年次大会等

支部ニュースに詳しい予定が掲載されておりますので、そちらをご一読ください。

### 3. 広報局からのお知らせ

- ① 事務局と連携して、2019年度を目処にHP掲載コンテンツの拡充ならびにレイアウトの見直しを計画しています。
- ② 現在、全国版のMLの構築を計画しております。本NL20頁のご案内を参照いただき、メールアドレスの登録（または更新）をお願いいたします。
- ③ 広報局では他学会の情報や教員公募情報なども積極的にアップしていくことにしております。現在も、いくつかの研究学会の年次大会案内や教員公募などの情報をアップしています。ぜひ、ご活用ください。
- ④ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。HPにアップロードしたいと思います。
- ⑤ ホームページ (<http://www.caj1971.com>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸甚です。

(広報局長 小山 哲春)

## JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。今回は、フェリス女学院大学の藤巻光浩先生に書評をご投稿いただきました。藤巻先生、どうもありがとうございます。他の皆さまも、以下の要領で奮ってご寄稿ください。

### ① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介します。和文で 250～500 字程度の原稿を受け付けております。

### ② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

### ③ 書評 / 教科書（テキスト）紹介

コミュニケーションおよび関連領域の著書に関する書評、および、コミュニケーション関連の教科書（テキスト）等の紹介を受け付けております。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

### ④ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会の NL 表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

## 書評

『少しでも政治を考えよう！—若者が変える社会—』

島村輝、小ヶ谷千穂、渡辺信二編著、松柏社、2018年。

藤巻光浩（フェリス女学院大学）

本書は、フェリス女学院大学の授業の中から登場したシティズンシップ教育に関するものである（私が赴任する前のことだ）。「シティズンシップ」の定義・説明のための方法・視点は、時には混乱もきたすことがある。なぜなら、このことばは、人々が「市民 (citizens)」として現れる経路として機能するために、これをできるだけ管理し、そこで現れる人々の数・存在を抑制したい側の欲望と、「市民」として現れることを希求する側がせめぎ合う境界線上に位置するためだ。一方、本書は、「他者のために」というフェリスのスクール・モットーを反映させ、人々が「市民」として現れようとする側に立ち、シティズンシップが争点になる事例や、そこでの考え方を豊富に紹介している。

能動的な市民育成だけを謳った啓蒙書のように見えるのだが、本書の執筆陣を束ねた編者たちの意図はもっと彼方にあるように見受けられる。というのも、本書が取りそえる章のすべてが人々の「能動性」だけに絞ったものではないためだ。能動的ということばは、「自分の作用を他に及ぼすこと」や「はたらきかけ」とあり、自分が行為の主体となり、自ら行為を起こすことで他の人たちや社会に対して、文字通りはたらきかけをすることが一般的に定着している。とかくシティズンシップ教育という、投票年齢が18歳に引き下げられたことを受けて、投票行動にばかり焦点が当たるために、どうしても人々が具体的に行為を遂行すること、つまり能動性ばかりが取りざたされてきた。

一方、世の中には多忙であることや病気であること、人前に出ることができない、または困難を覚える人々も多数いる。そのような人々に能動性を強いることは、押しつけがましい政治参加につながりかねないし、逆効果のこともある。本書は、複数のシティズンシップ教育の類型と可能性を見せてくれているために、その多様性を担保しようとしている。私が思うに、本書のこの部分が一番評価されてしかるべきところだ。能動的政治参加の持つ可能性に加え、人があるがままの状態で「市民」として現れるための条件作りの方法そのものが、誰をも締

め出さないシティズンシップ教育の根幹にある（「国家」でもなく、「共通の」でもなく、「オープン」としての公共<public>）。

この意味で、第1章、第2章は、人々が「市民」として現れるための制度・条件とは何かを丁寧に説明してくれている。第2章では、日本の判事の人事権が最高裁に握られることによって、司法の公正がゆがめられているとの指摘は非常に興味深い。また、第8章の音楽から考える自由や人とのつながりについての文章や、第9章の女性の身体の歴史的な位置付けを批評し、複数の性やリプロダクティブ・ライツというテーマを抽出する文章は、読者たち自らが政治的に現れるための条件について考える上で重要なものであった。

中でも、第5章のハンナ・アーレントに倣った文章は、人が人として現れる条件を、人間存在そのものの特徴に求めている点で、本書の核心部分を担っているように見受けられた。「人間」という漢字が人と人との間を指標する「じんかん」そのものであることを思い起こしていただければ合点がいくだろうが、「人が間にある」存在であることを踏まえ、そこで不可避に向き合うべき（人と人との間にある複数の関係性⇒）公共であるという重要なテーマを提示している。しかも、このような公共性を排除した状態を政治的な「貧困」として定位しており、人が「市民」として現れるためのシティズンシップの根本的な条件・前提を記している（古典期共和主義的レートリケー）。この章は、立憲主義という政治体制の枠組みについて書いている序章と補完関係にある。

また、知識を身に着けることで、人として現れることの可能性を説いたものとしては、カルト対策が目指す人権教育の意義を説いた第3章、生産手段を持たない労働者が人として現れるためのシナリオを提示した第6章、「慰安婦」問題に引き付け、性教育を核とした人権教育の大切さを訴える第11章がある。知識がなければ他者や社会、そして組織との関係性を認識することなど到底不可能であるため、これらは不可欠な章であった。

それに加え、能動的政治参加について記した章もある。



68年の学生運動が促した社会変革を説明した第4章、フィリピンのラリー文化を紹介し、参加の楽しさを教えてくれる第10章である。特に、第12章はフェリスの卒業生による市民参加の実践紹介となっている。広島・長崎の被爆者たちの体験を米国で訴えることは、「唯一被爆国」としての地位だけを訴える偏狭なものに陥りがちだが、自分のオーディエンスである米国人と向かい合うことで、加害国としての日本の姿にも考えが及んだことは、地球市民として他者から認識を獲得するための経路をも示唆している。

最後に第7章について触れてみたい。私の専門分野「修辞」について言及のあった唯一の章であったことが理由ではなく（そもそもラテン語教育のための「修辞学」は随分とその政治的力を骨抜きにされたものであった）、別の理由で取り上げてみたい。人格陶冶、知的鍛錬、個人の確立を目的とするリベラル・アーツ教育を、フェリス女学院大学という教育現場に引き付け、「人間を相対化して宇宙や地球規模の視点から一つの種としての人間を捉えなおす視点」(p.116)を獲得することの重要性を説いて

いる。そして、その視点を育むためには、人文社会科学的素養を育み、その知見を蓄えることが重要であり、それは「一冊の本をきちんと「読む」こと」(p.117)から始まる、ということだ。

教育者・研究者として、この提言に異論をはさむことは到底不可能だ。一方、出版資本主義と結びついた「読書」という営みが、今や風前の灯火にあることも無視することができない（本書の出版も難産だったはずだ）。声の文化から文字の文化へ、そして、文字の文化から印刷文化の時代へ、そしてラジオ・テレビが席捲した「第二の声の文化」時代を経て、現在スマホ時代へとコミュニケーション・メディアは大きく変遷を遂げている。人間の知識獲得・生成の方法は、メディアの技術革新と伴に大きく変化してきたのだ。それを踏まえ、「市民」として政治的に現れることであれ、その知識を獲得することであれ、「読書」が黄昏時を迎えた今、コミュニケーション・メディア史の系譜学の中でシティズンシップ教育について考察する必要がある。この章の著者には、大きな課題をいただいたと認識している。

# 支部ニュース

## 北海道支部

(支部長 長谷川 聡)

北海道支部は昨年度からの一年間、通常の支部活動に加えて、今春6月9・10日に開催された全国大会の当番支部としてその企画・運営に力を注いできました。五島前会長はじめ理事の皆さま、支部会員に支えられてこれを成功裏に終了することができました。ここに改めて、皆様にご助力ご協力のお礼を申し上げます。有難うございました。

その大会時期は支部総会の時期でもあることから、今年度支部総会は大会期間中の支部パネルの時間に開催いたしました。今期は役員改選期であったため、支部会員数の少ない本支部としては「人事大変」でしたが、以下のように新体制を整えることができました。

支部長	佐々木智之 (北海道科学大学)
副支部長	竹内康二 (札幌国際大学)
事務局長	長谷川聡 (北海道医療大学)
会計	水島梨紗 (札幌学院大学)
監査	山田晃子 (藤女子大学)
運営委員	足利俊彦 (北海道医療大学)
同上	塚越博史 (北海道医療大学)
同上	北間砂織 (北海道医療大学)
同上	目時光紀 (天使大学)

支部規約により、運営委員は年度・任期途中でも追加できることになっていますので、の事業・行事等で新たな人材が必要となった時にはぜひ、諸兄弟会員の皆さまにご助力をお願いすることになります。ご厚情をいただければ幸いです。

予定の決まった今年度のイベントとしては、支部大会を10～11月頃に、恒例となった北海道内関連3学会合同研究会は、北海道科学大学にて2019年3月3日(日)に行うことになりました。関係者には改めて周知いたしますので、しばらくお待ちください。

## 東北支部

(支部長 関 久美子)

東北支部では第19回支部研究大会を12月1日(土)に開催いたします。場所は仙台ガーデンパレス(仙台駅東口から徒歩3分)で、12時30分受付開始、17時終了を予定しております。テーマは「ヒューマン・コミュニケーション」とし、情報化社会の中、また人間に代わるAIの技術が目覚しく進歩している中、あらためて「人間主導のコミュニケーション」について再考したいと思います。研究発表のほか、現在パネルディスカッションを計画中です。発表をご希望される方は、「氏名・所属・連絡先・発表タイトル・要旨(200~300字程度)」をメールにて [kseki \[ @ を入れる \] n-seiryu.ac.jp](mailto:kseki@[@を入れる]n-seiryu.ac.jp) (関) までお送りください。また、参加ご希望の方は「氏名・所属：懇親会参加の有無」をお知らせください。締め切りは11月5日(月)です。

参加費は無料となっております。ぜひ全国の会員の皆さまのご参加をお待ちしております。

## 関東支部

(支部長 小西 卓三)

JCA 関東支部は2018年度に以下の活動を計画しております。

### 1 シンポジウム「コミュニケーション学の現在」

2017年6月のJCA第47回年次大会では、「コミュニケーションと未来」というタイトルで、未来を見据えた上でコミュニケーション学について議論が行われた。本シンポジウムは年次大会への一つの答えとして、「コミュニケーション学の現在」と銘打ち、これまでのコミュニケーション学とその現在のあり方について、様々な立場から考える機会を提供したい。

日時： 2018年12月9日 13:00-16:30

場所： 昭和女子大学

登壇者：高井次郎（JCA 会長）

青沼智（JCA 副会長）

五島幸一（JCA 前会長、現理事）

参加費：無料

参加連絡先：[k-matsum\[at\]nishogakusha-u.ac.jp](mailto:k-matsum[at]nishogakusha-u.ac.jp)

（支部運営委員 松本健太郎）

## 2 卒業論文・卒業制作合同発表会

コミュニケーション研究者同士の交流の機会は少なからず存在するが、大学の学部でコミュニケーション学を学ぶ学生間の交流の機会はそれほど提供されてこなかったように思われる。本企画では、卒業論文・卒業制作の合同発表会を行うことで、コミュニケーション学の多様性や楽しさを感じる機会を提供していきたい。2019年2月17日、二松学舎大学九段キャンパス（東京）での開催予定である。



## 中部支部

（支部長 森泉 哲）

2018年度年次大会時の支部会で支部長を務めさせていただくことになりました。前号のニュースレターで藤巻前支部長が今後の支部活動に対して提言されている通り、大学院生など若手研究者が参加しやすい組織づくり、すべての機能をもったミニ中央を作るのではなく、中部支部の特徴を生かした活動づくりを目指していきたいと思っております。2年間どうぞよろしくお願いいたします。

今年度第1回研究会を以下のように実施いたしました。

日時：2018年9月14日（金）15:00-17:45

場所：南山大学Q棟Q701教室

内容：

15:00-16:30 招待講演 北村 雅則氏（南山大学国際教養学部准教授）「異文化への適応過程に見られるコミュニケーション能力の獲得と変容の記述—海外在住経験を持つ日本人サッカー選手へのインタビューを通して—」

16:45-17:45 今後の運営体制・支部研究のありかたについて ディスカッション

18:00- 懇親会

招待講演でコミュニケーション能力とは何かについて検討でき、また今後の支部研究活動のあり方について議論できる有意義な会となりました。さらに今後の運営体制についても話し合いを行い、運営委員を選出いたしました。

支部大会という形でこの数年実施してきましたが、参加者同士がより密にコミュニケーションを通して自身の教育研究活動に生かせるように、研究会という形で少なくともこの2年間は実施していきたいと思っております。名称は研究会ですが、参加は支部会員のほか、他支部の会員の方々、また会員からのご紹介の方々であれば参加していただけますので、ご関心のある方々ぜひご参加ください。今年度第2回研究会は2019年3月9日（土）に開催予定です。



## 関西支部

（支部長 守崎 誠一）

例年3月に開催していましたが春季の支部大会を諸事情で開催することができませんでした。しかし、11月には秋季の支部研究会の実施を計画しています。日時や開催場所等については未定となっておりますが、詳細が決定した段階で支部のホームページでお知らせいたします。多くの会員の方々の参加を希望いたします。



## 中国・四国支部

（支部長 脇 忠幸）

中国・四国支部では、第21回支部大会を下記の通り開催いたします。

日時：2018年11月24日（土） 13:00-  
場所：福山大学 宮地茂記念館（福山駅北口出ですぐ）  
全体テーマ：「地域を／で研究すること」  
参加費：無料

発表者の募集も随時受け付けております。中国四国支部のメンバーに限らず、全国の会員の皆様に申し込んでいただきたいと思っております。

申し込み締め切り：2018年10月22日（月）  
必要事項：メールに題目と和文または英文の要約を添付し、件名「JCAcs18」で送ってください。  
申し込み先：[reinelt.rudolf.myf@chime-u.ac.jp](mailto:reinelt.rudolf.myf@chime-u.ac.jp)

今回は、全体テーマである「地域を／で研究すること」に関するミニシンポジウムを実施する予定です。例年の基調講演に代わる新たな試みとなります。

なお、今大会における詳しい案内を含むJCA 中国・四国支部ニュースレターを後日発行予定です。昨年度の支部大会の発表資料は、Rudolf Reinelt 先生のHPに掲載されています。ぜひご覧ください。<<http://web.icc.chime-u.ac.jp/reinelt/JCAcs2017Comp/JCAcs2017PresentationsVolumeandNL43.htm>>



（支部長 池田 理知子）

九州支部では、第25回支部大会を9月22日（土）に大分市のホルトホール大分で開催しました。大会テーマは「記憶の継承 Part II—コミュニケーション学の視点から—」です。詳細なご報告は次号で行います。

支部紀要『九州コミュニケーション研究』（第15号）に関しては、10月末の発行に向けて作業を進めているところです。研究論文1本と特別企画が掲載される予定です。

## 日本コミュニケーション学会 2018年度 役員一覧

(2018年4月1日～2019年3月31日)

会長	高井 次郎	名古屋大学
副会長 (総務担当)	守崎 誠一	関西大学
副会長 (学術担当)	青沼 智	津田塾大学
事務局長	高永 茂	広島大学
副事務局長	菅家 知洋	東海大学
副事務局長	松島 綾	立命館大学
学術局長	山口 生史	明治大学
副学術局長 (ジャーナル担当)	大橋 理枝	放送大学
副学術局長 (年次大会等担当)	長谷川 聡	北海道医療大学
広報局長	小山 哲春	京都ノートルダム女子大学
副広報局長 (ニューズレター担当)	田島 慎朗	神田外語大学
副広報局長 (ホームページ担当)	石橋 嘉一	青森中央学院大学
理事 (企画担当)	五島 幸一	愛知淑徳大学
理事 (渉外担当)	末田 清子	青山学院大学
理事 (50周年記念担当)	宮原 哲	西南学院大学
理事 (北海道支部長)	佐々木 智之	北海道科学大学
理事 (東北支部長)	関 久美子	新潟青陵大学短期大学部
理事 (関東支部長)	小西 卓三	昭和女子大学
理事 (中部支部長)	森泉 哲	南山大学
理事 (関西支部長)	守崎 誠一	関西大学
理事 (中国・四国支部長)	脇 忠幸	福山大学
理事 (九州支部長)	池田 理知子	福岡女学院大学
監事	鳥越 千絵	西南学院大学
監事	丸山 真純	長崎大学

## 学会連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

FAX : 03-3368-2822

jcom-post[ @を入れる ]bunken.co.jp

# NL の電子版への完全移行のお知らせと メールアドレス登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

日本コミュニケーション学会では、現在、HP の改修、並びに全国版会員 ML の構築を計画しております。将来的にはメールマガジンの配信も視野に入れ、さらに検討を続けていきます。つきましては、会員の皆様には、本学会 HP（学会支援機構データベース）にて メールアドレスの登録 をお願い申し上げます（下記の方法をご覧ください。）今後、NL の配信を含めた学会の広報活動を効率化し、会員の皆様とより情報価の高いコミュニケーションを取れますよう、ご協力をお願いいたします。

- ① 本学会 HP (<http://www.caj1971.com>) にアクセス
- ② 左側メニュー「会員各種手続き (Membership)」をクリック
- ③ ページ中頃の「各種変更手続き」の下「1 オンラインで Web 登録情報確認・変更、会費残高照会のページ」をクリック
- ④ 会員番号とパスワードを利用してログインし、メールアドレスを登録 (変更) して下さい。

\* ご登録いただきましたメールアドレスは、学会（学生支援機構）が責任を持って管理し、学会からのお知らせの配信（および、これに係るメーリングリストの構築）以外の目的では使用しません。

- 会員番号は、学会からの郵送物の宛名ラベルの中に印字されています（10 桁の番号）
- パスワードをお忘れの場合には、上記④の画面で、「パスワードの問い合わせ」をクリックして手続きを行って下さい。

## 編集後記

2018 年最後のニュースレターをお届けいたします。お忙しいところ、ご執筆・校正にご協力いただいた皆さま方には、深く御礼申し上げます。

今年度から会長が変わり、JCA はまた新たな一歩を踏み出します。会員の皆さま、関係者の皆さまには、今後とも変わらぬご愛顧をお願い申し上げます。

広報局 ニュースレター担当 田島慎朗